

## 道元禅思想の研究-中国禅思想との関連において-

著者	何 燕生
号	47
発行年	1996
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14360">http://hdl.handle.net/10097/14360</a>

HE  
何

YAN  
燕

SHENG  
生

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第47号

学位授与年月日 平成9年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)  
実践哲学専攻

学位論文題目 道元禅思想の研究——中国禅思想との関連において——

論文審査委員 (主査)  
教授 華園聰麿 教授 中嶋隆藏  
助教授 鈴木岩弓

## 論文内容の要旨

道元の禅思想に関する研究は、これまで数多くの研究者によってなされてきた。しかし、研究方法の限界もしくは研究者自身の問題関心の偏向等により、道元の禅思想の全体像は依然として不透明である。道元の禅思想が、自身の独創によるのか、それとも彼がそれまでに会った様々な師から継承し、その上で自分なりにそれを整合したものであるのか、という問題についての評価は、必ずしも客観的なものではなかったように思われる。これまでの研究の多くは、道元の禅思想は禅思想史上他者の追隨を許さないものであると見做し、道元の禅思想の独自性を強調し、誇張してきたものと認められる。しかしこれらの研究では、道元に齎らされた他の人々の思想的影響を余りにも過小評価しているのではないかと、更に言えば、ほとんど無視しているのではないだろうか。これは、道元の禅思想を発展し成熟させた歴史的背景や禅思想の性格、および道元を論じる際に用いる文献史料などに対して十分な注意を払わなかったことによるものと思われる。こうした不備を補い是正するためには、従来とは異なったアプローチが求められることとなる。禅宗研究の泰斗柳田聖山氏は道元研究の現状に対して、次のように発言している。

道元の仏教というものを、もう一度新しい立場で、つまり中国仏教なり中国禅宗史の大きな流れの中で、道元の『正法眼藏』なり『広録』というものを一つ一つ読み直してみれば、いろんな問題を含んでいると思うですけれども、中国仏教の大きな流れの中に位置付けての道元の評価というものは、従来もっとも手薄になっているんじゃないかというような気が、私にはする

わけであります。

(柳田聖山『『正法眼藏』と公案』〈公開講演〉、『駒沢大学仏教学部論集』第9号所収)  
傾聴すべき発言であると思う。筆者は、中国の禅思想の伝統を受け継いだ道元の禅思想に対する正確な理解もしくは正当な評価は、中国禅文献に基づいて道元の禅思想を中国のそれで照射し、正確な歴史的視座や思想の脈絡の中において考察する時にのみ可能であると考えている。本論はそうした視点に立って、道元の禅思想を検討することを目的とするものであるが、かかる考察を通して、道元の禅思想の解明におよ一層の光を投げ掛けるための新たな地平を開き、禅仏教史上その思想に匹敵するものがないと言われてきたような人物に対する、より批判的理解と真の客観的評価のための新たな視座を提供することができるものとするものである。

さて、宗教者における宗教思想の形成は、その経験と深い関係を持っており、宗教者の思想を学問的に研究する場合、その経験が思想形成に与えた影響への考察が不可欠であるとされる。周知の通り、道元は鎌倉時代に活躍した禅僧だが、彼とはほぼ同時代の仏教者親鸞や日蓮とは違って、入宋留学という独自の経験を持っている。道元の禅思想の形成に与えた入宋経験の影響は極めて大きく、その禅思想をして中国と密接な関係を持たせたことが予想される。したがって、道元の禅思想を研究する場合、入宋留学時に彼が受けた中国の禅思想の影響に対する検討が重要であり、その内容、性格を客観的に把握するためには、中国のそれとの関連において道元の禅思想を検討する視点が求められよう。本論は、道元が「正伝の仏法」と仰ぐ中国の禅思想を、どのように受容したか、そしてそれをどのように展開させたかという点につき、中国の禅思想との関連・比較に視点を据えて考察しようとするものである。

しかし、道元と中国の禅思想との関わりが深いと言っても、「五家七宗」と言われる中国の禅思想のすべてに彼が関心を抱いていたわけではない。道元は自己の宗教を確立するために、必要に応じて、ある特定の立場の人物や思想に関心を示し、それらと関わったのである。したがって、中国の禅思想との関わりという視点から道元の中国禅思想理解を探ろうとする場合、彼が深く関わっていた人物や事柄にこそ着目すべきである。道元と無関係の人物や事柄を取り上げ、それらを強引に道元の思想と結びつけて捉えるのは、この場合無意味であり、問題の解明には決してならないと思われる。かくして、本論は、中国の禅思想の中で重要な位置を占め、また道元の禅思想の形成と発展に根底から関わったと思われる天童如浄(1162～1227)、宏智正覚(1091～1157)、曹溪惠能(638～713)を取り上げ、これらの3人の思想を道元がどう理解したか、また中国の禅思想における心常相滅論と三教一致説を道元がどう批判したかという問題を取り上げ検討する。

本論は、二篇九章で構成され、それぞれの要旨は次の通りである。

第一篇「道元の人とその著作」は、道元がどのような生涯を送り、またどのようにしてその禅思想を形成し、さらにその主要な著作は如何なる内容を説くものかを、従来の研究を踏まえながら概観し、かつその問題点を指摘し、検討することを内容とする。道元の禅思想を明らかにするために、これらは不可欠な作業であり、これを第一篇とする。本篇は三章から成る。

第一章「道元の生涯をめぐる諸問題」は、道元の生涯を記した現存する諸伝記と道元の著述に見られる彼自身の求法活動への言及とを手がかりに、その生涯において不明瞭と思われる事績について、従来の研究を踏まえながら検討したものである。その人物の歴史的役割もしくは宗教的存在が偉大であればあるほど、その思想的影響が大きければ大きいほど、また、その生存の年代が遠けれ

ば遠いほど、その描写には伝記作者の主観や誇張が入りやすく、実像が虚像に変化しがちであるといわれる。道元の伝記の場合にもそうした事情が看取され、道元の実像理解に多くの曖昧な点を齎らしているのである。例えば、『碧巖録』の将来の問題がその一例である。江戸時代に成立した種々の道元伝記によると、道元が日本への帰国に際し、大権現修理菩薩の助筆を得て一夜に『碧巖録』を書写し、それを日本に持ってきたという。しかし、江戸時代以前に成立した諸伝記にはそうした記載が全く見られない。本章では、いつの時代、誰によって、いかなる立場から伝記が著わされたのかという点にできる限り考慮を払い、能うる限り客観的に道元の生涯をめぐる諸問題を検討した上で、私見を述べる。史料の不足により、解明不能の問題もあるが、その場合は問題の所在を指摘し、今後の課題とする。

第二章「迷途・覚路・夢中——道元の禅思想の形成について——」は、道元の詩偈集に見える「迷途」・「覚路」・「夢中」という三つの言葉に着目し、それぞれの意味を吟味しながら、それらを道元の人生経歴と求法過程に照らして探ることによって、その禅思想の形成を考察したものである。道元思想形成に決定的な影響を与えたのは、言うまでもなく師如浄である。しかし、その求法の過程の中で道元が出会った人物は単に如浄一人ではないし、如浄が最初でもない。如浄と出会う以前、すでに数多くの禅僧と邂逅していたのである。しかも、それらの禅僧の殆どはその名前が中国の文献に見えず、いずれも無名の禅僧であったにも関わらず、道元は自らの著述の中でこれらの禅僧のことを取り上げ、または一卷を設けて、それぞれの禅風と人格とを讃えているのである。本章ではそうした事実を具体的に明らかにし、道元思想形成に与えた如浄以外の無名の禅僧の思想的影響を中心に論じる。

第三章「道元の著作について」は、道元の諸著述の中から代表的と思われる『正法眼藏』・『永平広録』・『正法眼藏随聞記』・『宝慶記』を取り上げ、その内容を概観すると共に、それらにおける諸問題を指摘し、検討する章である。これらの書物における諸問題については、従来多くの研究者が論究してきたが、しかし、史料の不足のため、多くの問題が未解決のままに残されている。それらの殆どは、新たな史料が発見されない限り、解明不可能の問題ばかりであるが、どの点が問題とされているかを確認するだけでも、それなりの意義があるわけであり、道元の禅思想を論じる際の文献の取り扱いに必要な注意を喚起するものと思われる。

第二篇「道元における中国禅思想の理解」は、本論文の中心であり、具体的には以下の諸問題について検討する。

第一章「道元と如浄（上）——『如浄統語録』の真偽問題をめぐって——」では、道元の師如浄の思想を伝えとされる現存の『如浄統語録』は果たして如浄が述べたものをその弟子義遠が編集したものかどうかを探る。道元の禅思想を考える場合、それに先立って、その師如浄の思想を解明しておかなければならないが、しかし、如浄の思想には不透明なところが多く、とりわけ彼が「上堂」などで語った言葉を記録した語録はその成立と内容について多くの問題がある。本章は問題が最も多いとされる『如浄統語録』について、その本文の表現と内容を検討した結果、『如浄統語録』に伝えられている如浄の思想と『如浄語録』によって伝えられている如浄の思想との間にかんがりの出入りが認められた外、その表現においても、両者共通している部分が殆どなく、相違もしくは矛盾している点が多く認められるということが判明した。そして、『如浄統語録』に引用されている唐代の曹山の言葉について検討を加え、曹山が述べたとされる言葉は宋代に成立した曹山の語録の

諸本には見受けられず、江戸時代の日本で成立した曹山の語録のみに見受けられるということが明らかとなり、『如浄続語録』の成立年代は如浄が生存していた南宋時代ではなく、日本の江戸時代であったことが知られる。それらの理由により、本章は、如浄の思想を伝えるとされる『如浄続語録』を、如浄が述べたものをその弟子義遠が編集したものではなく、義遠の編集に託した江戸時代の日本人の手による偽撰書であると論証したのである。

第二章「道元と如浄（下）——修証思想の異同をめぐる——」では、道元の宗教思想における核心を示す「只管打坐（修）・身心脱落（証）」の意味を吟味しながら、このような考えがその師の如浄にすでに存在していたかどうかを検討する。「身心脱落」という言葉は『如浄語録』には確かにはない。『如浄語録』には「心塵脱落」という言葉が見えるが、道元の言う「身心脱落」の意味とは異なっているとされる。したがって、修証思想をめぐる、道元とその師如浄との間には、立場の相違があるとされる。しかし、「身心脱落」とは身と心の脱落を言うものであり、それを仏教の言う「身心一如」と同じ意味だと解釈することが可能であれば、如浄にもそのような考えがあったとも言える。本章は、『如浄語録』と如浄の下での道元の求法記録である『宝慶記』を主要材料とし、修証の捉え方をめぐる道元と如浄の異同の問題に確かな照明を与えることを目指している。

第三章「彫文喪徳と琢磨増輝——道元における宏智理解——」は、道元の『正法眼藏』や『永平広録』における宏智の言葉の引用や言及の実態を調べることを通して、道元における宏智理解の問題を考察したものである。宏智は南宋時代に曹洞禅を集大成した人物であるとされ、道元の著述にも頻りに登場しているが、しかし、その思想の一端を示す「彫文喪徳」という言葉を道元が引用するに当たって、それを「琢磨増輝」と書き改めている。これは如何なる意味を持っているのか。我々は道元のそうした「改竄」をどのように理解すべきであろうか。本章ではそれを道元における禅語理解の一般的特徴と見て、その理由を探ることとした。

第四章「仏性平等と悉有仏性——道元と恵能の仏性論——」においては、道元の禅思想の特徴の一つとされる仏性論を、中国禅宗の六祖恵能のそれと比較しながら、その異同を追求した。従来、道元の仏性論に関して、彼自身の著述に基づいた研究は数多くあるが、しかし、先行する禅僧との比較という方向からのアプローチは、皆無であり、そのため、仏性思想史上における道元の仏性論の位置付けは依然として不明となっている。本章は、仏性をめぐる道元と恵能の捉え方を比較検討した結果、仏性の平等性、仏性の非実体性、無常仏性という三位一体の仏性論は、恵能の仏性論の基本構造であると共に、道元の仏性論の基本構造でもあったことが知られた。また、道元が仏性を論じる際、恵能の仏性論をかなり意識し、恵能の仏性論の正当性を強調しようとしていた一方で、仏性論に関する具体的な捉え方については、道元は恵能と異なった形態をも持っていたことも明らかになった。それは、道元が漢文の「悉有仏性」を「悉有は仏性なり」というように読み換えることによって、仏性の意味や「悉有」の意味を拡大したという点である。本章ではそうした点を具体的に明らかにする一方、道元と恵能の仏性論に見られる相違を、両者の置かれた歴史的背景と、それぞれの持っていた知識構造の違いによる物事に対する関心の傾斜差異に求めるべきことを主張した。

第五章「道元における心常相滅論批判について」は、『正法眼藏』に見える中国禅思想に対する種々の批判の中から、代表的なものと思われる心常相滅論批判を取り上げ、道元の批判の具体的な対象や批判の意図を探ったものである。心は常住不変で、相である肉体は人間の死と共に滅すると

いう心常相滅論は唐代の禅思想界に幅広く見られる思想であったが、道元がそれを仏教の言う「身心一如」に背反する邪説として斥けたのである。道元は中国禅思想を「正伝の仏法」としながら、なぜその心常相滅論を批判したのであろうか。道元における中国禅思想の理解を検討する場合、道元のそうした中国の禅思想に対する批判の具体的な対象や批判の背景を明らかにする必要があると思われる。本章はかかる視点に立って検討した結果、道元が批判する心常相滅の見解は中国で南宗禅と呼ばれる洪州宗や荷沢宗の一般的な見解であり、その中でも特に馬祖道一とその門下の汾州甄叔および宗密の見解は、道元の批判した心常相滅論と用語が一致しているのみならず、内容もかなり類似していることが知られた。したがって、道元の批判しそうした人々を対象とするものであると考えることができる。そして、道元の批判の背景について、道元の批判を道元が生きていた時代の禅思想の状況に照らして探った結果、身と心を分けて捉え、身が滅するけれども心は永遠に存在し、人々は心が不生不滅だという道理を理解すればよいと主張する心常相滅論は、当時の日本の達磨宗や臨済宗の間で盛んに捉えられていた思想であり、道元的心常相滅論批判がそれらを背景としたものであると結論している。彼の批判の真の目的は、他ならぬ道元が宋朝で学んだ「正伝」なる禅思想を日本に確立し、さらに新たな禅伝統として日本社会に定着させようとするものであり、これが当時の道元に与えられた課題であり、求法の情熱に燃えた「入宋伝法沙門」道元の宗教理念と考えられる。

第六章「道元における三教一致説批判について」は、第五章と同じ意図で、『正法眼藏』や『永平広録』に盛んに見られる三教一致説批判を考察することを通して、道元における中国禅思想の受容の実態の一端を明らかにしようとするものである。道元が中国禅思想を「正伝の仏法」としながらも、三教一致説や心常相滅論を批判したのは、道元の禅思想が中国禅思想のすべてを無選択のまま移植し、受容したのではないことを意味していよう。しかし、前章で確認したように、道元がそれらを批判したのは、それなりの背景があったのである。その背景もしくは批判の背後に潜んでいると思われる諸問題を明らかにせず、単に批判したという現象に着目するだけでは不十分であり、真相の解明にはならないと思われる。道元の批判を当時の禅思想界の状況に照らして探る理由はここにこそある。かかる視点に立って検討した結果、道元における三教一致説批判は、前章で取り上げた心常相滅論批判と同様、当時の達磨宗と臨済宗の思想を背景としたものであり、自己の宗教を確立するために行なった宗派批判であると指摘した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は鎌倉時代の仏教思想家道元の禅思想を、彼が入宋して学んだ中国禅の歴史的・思想的背景から論じた研究であり、総序および二篇九章から構成されている。

総序は、道元が日本仏教史上傑出した思想家であり、古代日中両国の仏教文化交流史上においても重要な位置を占めていることを確認した上で、従来の研究の成果を概観し、その問題点を指摘する。即ち従来の研究の多くは道元の思想の独創性を強調するあまり、彼に影響を与えた思想家群について並びにその関連について過小もしくは偏向した評価しか与えてこなかったとする。このような批判を踏まえて、本論文は「道元の禅思想に対する正確な理解もしくは正当な評価は、中国の

禅文献に基づいて道元の禅思想を中国のそれで照射し、正確な歴史的視座や思想の脈絡の中において考察する時にのみ可能である」という立場で考察を進めていく。具体的な論述の仕方としては、長い歴史的伝統のもとに輩出した多くの思想家の中から、道元に対してとくに重要な影響を及ぼしたと考えられる三人の思想家、即ち天童如浄、宏智正覚および曹溪惠能を選び出して、道元によるその思想の理解を考察し、さらに中国の禅思想の諸説のうち、心常相滅論と三教一致説に対する道元の批判を検討する。

第一篇「道元の人とその著作」は、道元の思想の研究の土台をなすものとして、その生涯と著作について考察する。第一章「道元の生涯をめぐる諸問題」においては、先学の研究を手がかりにして道元の伝記上の諸問題を論じ、史料の信憑性についてなお多くの不明な点があることを指摘している。

第二章「迷途・覚路・夢中——道元における禅思想の形成について」は、彼の詩偈に見える迷途・覚路および夢中の三語に着目して、そこにその人生経歴もしくは悟達の段階的推移を読み取る。即ち人生無常の迷途から仏教修行の覚路に進み、最後に身心脱落の境地たる夢中に到達したことを詠んだものとし、本章もこの歷程に即して道元の生涯を辿る。とくに道元にとって如浄に劣らず決定的な影響を与えた多くの無名の禅僧の存在を想定し、中国禅の伝統を重要視すべきことを強調している。

第三章「道元の著作について」は、道元の主要な諸著作に関する疑問点を従来の研究に即して整理し、その思想を理解する際の文献の取り扱いに関して留意すべき点を指摘している。

第二篇「道元における中国禅思想の理解」は本論文の中心を成しており、六章に分かれている。第一章「道元と如浄（上）——『天童如浄禅師統語録』の真偽問題をめぐって——」は、道元の禅思想の形成にとって最も重要な契機となった天童如浄からの嗣法を考察するに当たり、如浄その人の禅思想を伝えるものとされる義遠撰『天童如浄禅師統語録』の信憑性を検討している。その結果、当該文献に見られる如浄のものとは異なる上堂の様式並びに表現および曹山に関する記述などから、それが江戸時代に義遠に仮託されて編まれたものであるとの結論に達し、その理由を当時の曹洞宗における嗣法の混乱と宗統復古運動に求める新しい見解を提示している。

第二章「道元と如浄（下）——修証思想の異同をめぐる——」は、「只管打坐」および「身心脱落」という表現で表される道元の中心的思想、即ち「修証一如」の思想をめぐる如浄との師資相承を考察している。従来、道元のこの思想をめぐるは、師の思想の機械的継承と見る説と道元の思想の独創性を示すものと見る対立した見方があったが、本論文は、いずれの見解ももっぱら如浄の『語録』に拘泥したり、如浄との関係のみに着目して、如浄を含む中国の禅思想の伝統との脈絡において理解する視点を欠いている、としてこれを斥ける。その理由は、論拠とされてきた如浄の『語録』そのもの並びに道元の『宝慶記』に問題がある点に求められ、むしろ如浄と道元の思想の構造そのものを比較すべきことが主張されている。具体的な論点としては、道元の「身心脱落」の語と如浄の「心塵脱落」の語との関係を、前者による後者の独創的な言い換えもしくは誤聴とする見解に対して、いずれの蓋然性をも否定し、「身心脱落」という表現は、すでに如浄に先立つ二百年も前から中国の禅僧によって用いられていた「身心」という熟語を踏襲したもので、身心脱落とはほぼ同じ意味の表現も多く見出されるとする。けだし一考に値する主張であろう。

第三章「彫文喪徳と琢磨増輝——道元における宏智理解について——」も、前章と同じ問題意識

から、道元により如浄とともに「古仏」と仰がれた宏智正覚の思想の理解に係る問題を、語句の改変を手がかりに考察している。道元が宏智の「皓玉無瑕、彫文喪徳」という語句を「皓玉無瑕、琢磨増輝」と書き替え、また宏智の『坐禅箴』の文字を改変したことについて、これを道元による宏智の思想の否定もしくはその克服と見なす説に反対し、それぞれの表現が用いられる脈絡、即ち「上堂」を考慮すべきこと、したがって思想の全体の構造から理解すべきことを主張している。さらに道元の宏智理解の鍵を、引用例の厳密な考証により、後者の「行」に対する関心に求め、自らの修証一等の立場から道元が宏智「古仏」と讃仰したことを明らかにしている。

第四章『「悉有仏性」と仏性平等——道元と恵能の仏性論——』は、従来の研究には先行思想との比較というアプローチが欠如していたという反省に立って、「悉有は仏性なり」という表現で表される道元独特の仏性論を、「仏性には南北あらず」と言った中国禅宗の六祖曹溪恵能のそれとを比較し、両者には仏性の平等性、仏性の非実体性および無常仏性を主張する点で共通性が認められるが、道元が「時間」という契機を加味した点に相違があるほか、両者の歴史的背景並びに知識構造の違いも考慮されるべきであるとする。

第五章「道元における心常相滅論批判」は、中国の禅思想を「正伝」と信じる道元が行った中国禅に対する批判の意義を考察する。道元的心常相滅論批判については、従来日本の中古天台の思想との関連において論じられることが多かったが、論難の対象とされている中心的語彙が中古天台思想には見出し難いことから、むしろ中国の禅思想を標的にしたものとするべきであるとの立場に立ち、馬祖道一門下を初めとする唐代南宗禅の批判の対象と想定する。そしてその意図は、当時馬祖系の影響下に修行無用論を蔓延させた達磨宗や臨済宗に対して、道元が自らの立場を鮮明にすることにあったと推測している。

第六章「道元における三教一致説批判」も前章と同じ問題意識から、中国における儒・仏・道三教一致説に対する道元の批判を通じて、彼の中国禅の理解の特徴を探究したものである。まずこの批判が始められた時期の道元の著作を手がかりにして、それが『法華経』の「諸法実相」という文句の自由な解釈という文脈のもとでなされていることを確認した上で、道元がこの文句の意義を解しない三教一致説の代弁者たちを「杜撰のともがら」と貶称したのは、『楞嚴経』と『円覚経』を重用し且つ三教一致を説く中国および日本の禅僧に対する批判であったとする。したがって道元の『法華経』重視をかつての比叡山における天台教学の影響と解する説は、全体的な視野を欠いたものとして退けられている。本章は、前章も同じく、道元といわゆる本覚法門思想との関係に関する研究に対して新たな一石を投ずるものである。

本論文は、道元の禅思想を中国の禅思想の歴史的・思想的な背景のもとに置き且つ思想構造という視点のもとで捉え直そうとしたものであり、その着眼点の斬新さと文献の精査により、魅力的な新知見を導き出しているのみならず、旧説に対して修正を施し、新しい研究の方向を示唆してもいる。もちろん道元の思想の独創性を検討するに当たり、その視点と論証に関して本論文はなお課題を残しており、道元自身の思想的傾向および当時の日本の仏教を取り巻く諸状況との関連の問題も、いまだ解決半ばにある。しかし、本論文が今後の道元研究並びに日本における禅思想の研究に対して大きな刺激を与えることは確かである。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。